

新・切手の日誌

Stamp Diary



2011年7月号

7月2日（60年代アメリカ概観）

いきなりドドンとコレクションを並べてみよう。好きなんだから。
ほとんど、米国の交換パートナーJoeから手に入れた。状態もよいが抜けも少なく全部揃えたい！
という意欲にそそられる。



50年代終わりはまだ単色切手（私がそう呼んでいる）が主流であるが、60年代に入ると多色刷りになり、内容もテーマ性を帯び始め、絵柄もデザイン性が高くなる。



1964





現物を眺めるのも楽しいが、スキャンをし、その画像を電子機器で眺めるのも何だか楽しい。宝物はこっそりしまって独り占めするなり、自慢したい要求に、スキャンした画像が応えてくれる。

個人的な思いで恐縮だが、スキャンが面白いのである。2次元のものを何でもかんでもスキャンし、画像として一元管理できるのが面白いのであろうか？ 本能の赴くまま、何でもすぐスキャンする私である。20年前にこんな楽しみを発見していたら、私は普通の会社員生活など送らなかつたかも。（大袈裟か）



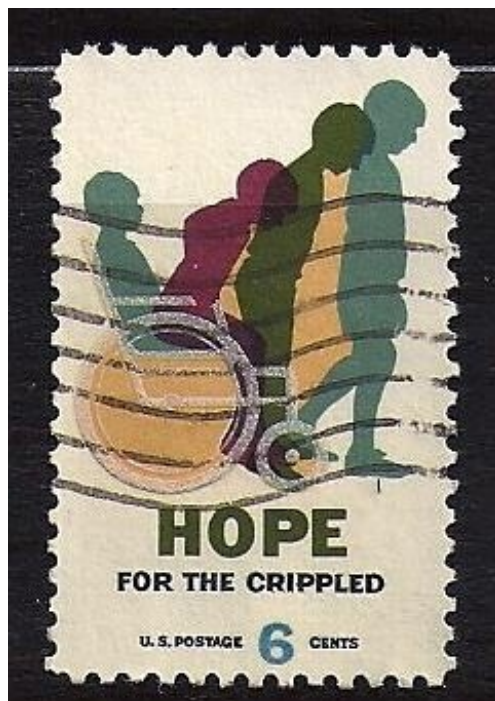
日本の60年代切手も興味深いが、アメリカも興味深い。まだまだ世の中に楽しみが少ないせいか、たかが切手1枚にしても、いろいろ工夫し考えている感じがする。

最初はきれいに陳列させたが、一枚一枚丁寧に整列させるより、このように乱雑に並べぎゅっと詰まった感じがコレクター心をくすぐられる。さて、いろいろ思い入れのある切手が多い年代であるが、今月の1枚として表紙に選んだものを明日紹介しよう。

7月3日（表紙）

私はこの一枚がかなり気に入っている。

1960年発行ベタな訳をすれば「傷ついた子供」というタイトルであるが、FOR THE CRIPPLEDをベタに訳すと「身体障害児の希望」であろうか。



図案も車いすから徐々に立上がっていく感じに希望(HOPE)を抱かせる感じが漂っている。それに内容とは関係ないが、よく眺めると車いす部分は重ね刷りがしてある！ 良い仕事、してますね。

色使いも私好みだし、こういうシンプルな構成、わかりやすい図案とガッツリテーマとシンクロしているところなどが（私の）評価ポイントである。

7月13日 (JFK)

ちょっと横道それますが、映画JFKの話をしてしよう。

1991年のアメリカ映画、監督はオリバー・ストーンで、内容は「ケネディ大統領暗殺事件の捜査に執念を燃やす地方検事ジム・ギャリソン（ケビン・コスナー）を中心に描いた現代史ミステリー。大統領暗殺における唯一の訴訟であるクレイ・ショー裁判を題材として描いている」とwikipediaには紹介されていた。

本当はアメリカ60年代を感じられる映画を観たいと思っていたのに、たまたま先月BSで放映されていたこれを見てしまった。背景の時代は60年代であるので、良しとした。間違いなく、以前にも観たことあるのだが、全く記憶になく、既視感を味わいながらも新鮮な気持ちで観ることができた。

ネタを明かしてしまう形となるが、暗殺は単独犯ではなく、広範囲に関係者がいるもっと組織的な複数犯であるというギャリソンの主張を軸に、そのとっかかりであろうクレイ・ショーを裁判に持ち込むが、結局ショーは無罪となり。そこから先はまた闇へと事件の根深さを実感させて終わる。

政治も経済も疎い私であるが、2008年のリーマン・ショック後の政界とウォール街大物の癒着(?)を思い起こさせた。マイケル・ムーア監督の「キャピタリズム～マネーは踊る～」に感化された部分もあろうが、結局のところ強欲が政治を動かしているのか(!)と学習した。

悲しいかな、戦争は景気を上昇させるのである。その戦争を回避したが故に、ケネディは秘密裏に暗殺されたに違いないと私はこの映画を観て結論付けた。そういう観点を踏まえると、マイケル・ムーアがウィキリークス支援表明で述べた「秘密の中にまぎれ、私たちの税を使い実行された犯罪をあばく仕事」という意味に説得性を覚える。

話が逸れた。大統領であるにも関わらず、国に暗殺されたケネディへの報いは歴史上人物として名を残し、切手となったことであろうか。3枚もある！とよく見たら、1枚は弟ロバートだった。まあ、弟も暗殺され、つくづくケネディ家は悲劇の代名詞の響きがある。



なお、現在は不自然に制限されているケネディ暗殺に関する資料が、2039年には公開されるらしい。そのとき真実は解明されるのか？ あと28年、私はおばあちゃんになっているが、是非ともあの世への土産話として、この世で聞いておきたい。

7月27日 (William Harnett)

前(2011年2月)にも紹介したことがあるこの切手を改めて紹介しよう。1969年発行である。どうしてこの画家の作品が発行されたのかは知る由もないが、最近アートに凝り始めた私は小さい発見をした。



William Harnett (1848-1892)はひとふた昔前のアメリカの画家、日本で言えば坂本龍馬(1836-1867)と同世代かな？ 生まれはアイルランドでジャガイモ飢饉のときにアメリカに移住した移民、結局のところアメリカの画家なのでしょう。引き続き、アメリカサイトのwikipediaの説明によると、「騙し絵」的な写実主義（現実を空想によらず、ありのままに捉えようとする美術上、文学上の主張のこと）の画家のようである。

ふむふむ。ところで、写実主義って？とふと思った。

で、またwikipediaの説明を読むと、もともとヨーロッパでは17世紀から写実する画家は存在し、Harnettもその系譜に連なるのかもしれないが、美術の専門家ではない私はよくわからない。しかし、へえーと思ったのは、このHarnettの作品は美術館に飾られるものではなく、居酒屋(Tavern)やビジネス・オフィスに掛けられることが多く、結局のところ美術的価値よりも実生活において（まるで本物がそこに存在するかのよう）「騙し絵」として楽しめることが多かったという記述である。

個人的には美術館に入って忘れ去れるより、日々人々の目に留まって鑑賞（干渉？）される方がよいと思うけど。今となっては彼の作品も美術館におさまっているようですが。そもそも切手の絵柄として本能的に気に入っていたが、こういう背景がわかってくるとなお興味がわき、是非とも他の作品も観てみたくなる。かつては訳もわからずメトロポリタンやナショナルギャラリーなど美術館を駆け足で回って観ていたので、きっとそのとき目にしているのだろうな。よく「なんで、こんな絵を描いて、なんで、美術館に収納されているのだろう？」と漠然と思ったものだった。

細かいことは何であれ、わかってくると美術も楽しい。

7月29日（現代アート）

今月に入って、潜在的に関心あった現代アートが自分のなかで全面的に現れ出てきた。一つのきっかけは、アートフェア東京の存在を知り、行こうと楽しみにしていた！

<http://www.artfaiertokyo.com/>

結局は目先の別な誘いと人ごみにうんざり挫折してしまった。が、まだまだ自分のなかでブームは続いている。ということで、なかなか捨てるに忍びないつまらぬ切手を使って私も即席現代アートを作製してみた。（俳句じゃありませんが）

タイトルは"We Are The America!!"



むろん、私は日本人です。失礼しました。

本当はもう少し星条旗をfeature(特徴付けた)素敵なアメリカ切手があるので、配列も工夫し、仲間を増やしてみたいと考えている。

来月は溜まりに溜まったままのフレンチ・スタンプで妄想を深めてみたいと画策中。